

C10b 現存する日本最古の天文台跡について

渡部潤一 (国立天文台)

日本の天文学史によれば、日本最古の天体観測施設は、天武天皇三年に記されている「占星台」であるとされている。江戸時代になると、呼称は司天台あるいは測量台などと呼ばれ、「天文台」という名称が使われたのは江戸幕府天文方の「浅草天文台」のようである。

この頃には、地方の有力な藩の中でも、藩校に伴って天文台を設置し、暦学の教育を実地の天体観測と共に行っていたところもあり、会津藩の日新館、水戸藩の弘道館、薩摩藩の造土館が、その代表である。日新館は、戊辰戦争によって木造の建物は戦火にみまわれ、焼失したが、この天文台跡は石垣が残ったために、唯一現存する施設跡である。

浅草天文台や、京都市内の天文台跡や他藩の天文台跡が、視認できる形では残っていないことから、現存する天文台跡としては、会津日新館天文台跡が日本最古と考えられ、その価値を鑑みると、今後の保存に期待したいところである。

参考文献：「日本の天文史跡目録」、松尾他（2006）